



小室 達  
(しばたの郷土館提供)

も忘れて、板を彫り続けました。

(どのように彫ったら、きれいに仕上がって、見た人が喜ぶだろうか。)  
何枚か彫るごとに友達に意見を求めた結果、自分でも満足のいくものができあがり  
ました。

運動会当日、青空の下で三十か国の旗が、風で揺れていました。それらを笑顔で  
見上げる人たちの姿を見て、達は、胸が熱くなりました。

このような少年時代の経験から、彫刻家を目指した達は、東京美術学校（現在  
の東京芸術大学）の彫刻科に進み、一生懸命研究にはげみました。努力を重ねた  
達は、在学中に国内で有名な帝展で入選するほどの実力を身につけました。卒業後  
も帝展で何度も入選し、日本を代表する彫刻家になった達は、東京のアトリエで作  
品作りに打ちこみました。

昭和八（一九三三）年、三十五歳になった達のもとにふるさとの友達から、興味  
深い話が伝わってきました。それは、宮城県青年団が、不景気や不作で苦しんでい



仙台城址にある伊達政宗公騎馬像

万国旗…  
世界の国々の国旗。

版木…  
版画などに使う、  
文字や絵を彫りつ  
ける木の板。

帝展…  
大正時代の帝国美  
術院の展覧会。

アトリエ…  
芸術家が、作品  
制作をする作業場。

不景気…  
社会全体の経済活  
動の状態がよくな  
らないうち。

仙台城址…  
仙台城があった跡。

文献…  
研究などの参考  
資料となる文書や  
書物。

騎馬像…  
馬に乗っている像。

一生一代…  
一生に二度とない  
ような重大なこと。

一尺…  
約三十センチメー  
トル。  
一寸…  
約三センチメー  
トル。

瑞巖寺…  
伊達家の先祖代々  
のお墓があるところ  
で政宗公の木像  
がある。

瑞鳳殿…  
伊達政宗公が祭ら  
れている建物で政  
宗公の木像がある。

骨格…  
からだの骨組み。

る県民を元気にするために、仙台城址に伊達政宗公の銅像を建てようという話でいた。ふるさとのことをなつかしんでいた達の頭の中に、もし自分に制作の依頼がきたら、どんな銅像を作るだろうという思いがうかんできました。

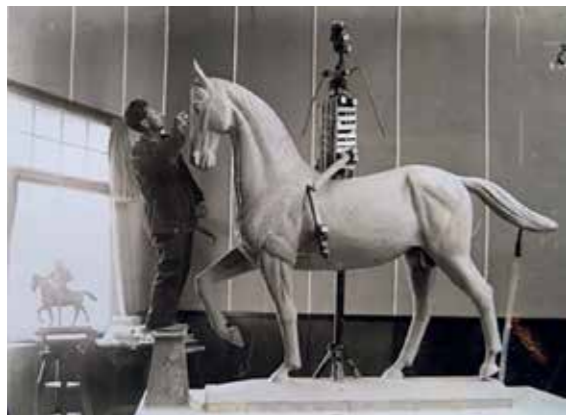
達は、さっそく政宗公がどのような人物だったのか調べ始めました。古い文献をいろいろと読んでいるうちに、武将として知られている政宗公は、戦いだけでなく、政治や文化の面でも優れた才能を発揮していたことを知りました。「仙台藩（宮城県）は、政宗公が作り始めた。銅像は、よろいかぶとを身につけ馬に乗った政宗公が、これから新しい街を作るといふ希望に胸をふくらませて、できたばかりの仙台城に入城する姿、騎馬像こそが県民を元気にさせるのではないか。」と考えました。

六月、青年団から、銅像の制作者に決定したという知らせが届きました。達は、今まで取り組んできた帝展への出品をどうするか悩みましたが、（県民を元気にする作品を作るため、一生一代の仕事として、銅像作りに専念しよう。）と心に決めました。

その後の青年団との話合いで、銅像は、達が考えていた騎馬像になり、高さは、十一尺四寸（約三・四メートル）と決まりました。

達は、作品の参考にするため、瑞巖寺（松島）や瑞鳳殿（仙台市）に足を運び、江戸時代の政宗公の木像や絵などを調べました。また、馬の研究も行いました。本を何冊も買い集め、骨格や筋肉のことなどについて熱心に調べました。時には、実際に馬を見に行き動きを観察したり、馬の専門家に話を聞いたりしました。

研究を終えた達は、  
「まず、八尺五寸（約二・五メートル）の等身大の試作品を作ろう。はじめは、骨格作り、次にねん土をつけて政宗公と馬の形作りだ。」  
と、これから始まる作業について確認しました。達は、実物と同じ大きさの像で



骨格にねん土を付け試作品を作る  
(写真：しばたの郷土館提供)

細かい部分まで仕上げ、それを基に銅像を作れば、よりよい作品ができるだろうと考えたのです。

骨格作りが終わり、今後のことを考えていた達は、「私は、政宗公の銅像を作るために彫刻家になったような気がする。」とつぶやき、試作品作りを続けました。

達は、日本を代表する彫刻家になっていましたが、制作の途中で各分野の専門家に意見を求めることにしました。馬の専門家からは、「足の関節部分は、すべて直したほうがいい。」と言われ、

よろいかぶとの専門家からは、「刀の位置やかぶとの三日月のつけ方を直したほうがいい。馬具もずいぶん直すところがある。」と言われました。

(馬や馬具については、本や観察でたくさん研究してきたのだが……。)  
自ら意見を求めたとはいえ、修正点を指摘された時には、作業しようとして手にした道具が、いつもより重く感じられました。

達は、その後も様々な人に見てもらいました。厳しい指摘をされ、気持ちが落ちこむ時もありましたが、達の周りには、いつも相談に乗ってくれる人、はげましてくる人がいました。達は、心に決めたことを達成するため、さらに修正を重ねました。

「骨格作りから七か月。やっと試作品が完成した。これを基に、銅像の骨格を作り、もう一度、ねん土で形作りだ。」今度は、自分の身長より二メートル近くも高い像です。作業が思ったように進まず、夜遅くなることや体調がすぐれない時もありました。

(試作品より、よくなっている気がする。)  
達は、政宗公の騎馬像を笑顔で見上げる人たちの姿を想像しながら、手を止めることなく制作に打ちこみました。

銅像の骨格作りから三か月、ようやくねん土で作った像ができあがりました。

「次は、この像に石こうをつけて、銅像の型作りだ。」

昭和十(一九三五)年一月末、試作品の骨格作りから一年二か月。アトリエから鑄造所に運ばれていた銅像の型に、赤く輝く溶かされた金属が流し込まれました。

その様子を見ていた達の目からは、今にも涙があふれそうになりました。

そして、銅像の制作者に決まってから約二年が過ぎた五月。ついに伊達政宗公騎馬像が完成しました。仙台城址に向かうため、白い布が巻かれた重さ四・五トンの騎馬像は、トラクターにつけられた荷台に乗せられ、東京を出発しました。

達が生まれ育った槻木町(現在の柴田町槻木)では、ふるさとの人たちから政宗公にゆかりのある歌『さんさ時雨』の大合唱で迎えられました。沿道を埋め尽くす人々の姿を見た達の目には、熱いものがこみ上げてきました。

五月二十三日、伊達政宗公騎馬像の除幕式の日。政宗公の雄姿を一目見ようと県内外から、約千人の人たちが集まりました。銅像にかけられた幕が取られ、達の作品が披露されると、仙台城址全体を覆うような割れんばかりの拍手の音が鳴り響きました。

達は、政宗公の騎馬像を笑顔で見上げるたくさんの方の姿をじつと見つめていました。



専門家に見てもらった試作品  
(写真：しばたの郷土館提供)



鑄造所で完成した騎馬像  
(写真：しばたの郷土館提供)

### 小室 達

小室 達は、明治三十二(一八九九)年に槻木村入間田(現在の柴田町)で生まれた。銅像の制作者に選ばれるまでには、中学校時代の旧友佐藤忠太郎らが結成した「木馬会」の強い推薦もあった。騎馬像は、戦争のため解体され、戦後、上半身だけが金属集積所で発見された。昭和三十九(一九六四)年、残されていた石こう像(原型)を元に復元された。柴田町内の小中学校には、達が制作した人物像が飾られている。

馬具：  
馬を操るために付ける道具。

指摘：  
悪いところや、大切なところを見つけて、具体的に指摘すること。

鑄造所：  
金属を溶かして型に流し込み、固めてその形のものを作る所。

さんさ時雨：  
伊達軍が戦って勝った後に作られ、歌われた民謡。

雄姿：  
勢いがあり、おそれずに向かっていく様子。